

ふるさと再発見

～幕末維新と徳地～

幕末徳地の偶然 — 奇兵隊転陣の意義 —

幕末長州と言えば、萩市や下関市、山口市や防府市がいつも話題となりますが、実はここ徳地も幕末の大きな舞台となりました。シリーズの最後としてまとめてみましょう。

明治維新は、東アジアの小国「日本」が徳川幕府を倒して、西洋先進国と肩を並べた大事業・大変革でした。それは長州、薩摩、土佐、肥前の西国4藩を中心に進められました。中でも長州藩は、他藩に先駆けて下関海峡で米・仏・英・蘭の四カ国艦隊へ砲撃を仕掛け、攘夷（外国を打ち払う）を決行したのです。しかし結果は完全な敗北でした。この敗北をきっかけにして、新しい考え方が藩内に生まれてきます。それが身分を超えて志ある者が銃を持つ“奇兵隊”と軍備の急速な西洋化、そして倒幕を成し遂げることでした。

元治元年（1864年）の長州藩は、藩庁の移転を含めて大混乱となっていました。それは、下関戦争での敗北、京都での敗北（禁門の変）、第1次長州征伐決定などで、保守派（俗論派）と革新派（正義派）とが激しい権力争いを繰り広げたのです。その混乱が、歴史の流れとは無縁の静かな「徳地」を、突然、歴史の表舞台に押し出してきたのです。

元治元年9月4日、奇兵隊日誌に“徳地”の文字が、突如現れます。その後、次々と“徳地”が出てき、10月20日、奇兵隊が徳地へ転陣・駐屯をしてきます。そこには、

- ①芸州口から萩へと繋がる山代街道が、鹿野から串→堀を通して山口へ繋がったこと。
- ②第1次長州征伐の決定で、石見藩と接していたことから国境の町となったこと。
- ③俗論派と幕府軍に対峙するには、堀の地形（山や川など）が戦略上有利だったこと。

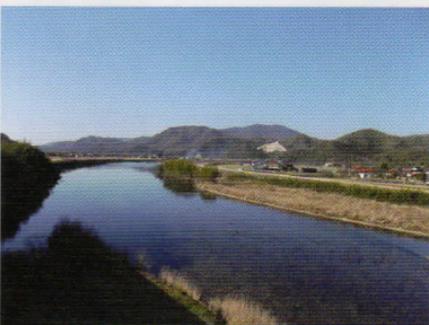
さらには、幕末の歴代徳地代官が正義派で固められていたことなどが徳地転陣の背景となったのでしょうか。藩の役職名簿や奇兵隊日誌には、山田宇右衛門、玉木文之進、松島剛蔵（楫取元彦の兄）、

服部半七郎、山県有朋、高杉晋作、時山直八、中岡慎太郎（土佐藩士）など、正義派のそうそうたるメンバーが“徳地”の地名と共に現れてきます。

幕末の偶然は「徳地」を歴史の激流に置きました。しかし、それは輝かしい日本の近代化への歴史に、ふるさと徳地が大きく貢献をした歴史として誇ってもよいのではないのでしょうか。（完）



銃（銃）部隊の「妙楽寺」跡
[堀深谷]



堀（濠）に見立てた佐波川・島地川
[堀出合付近]